

英語動機学習法

熊山晶久

要旨

「英語動機学習法」は著者がアメリカ社会、大学で36年間の生活体験、研究、それに探究してきたことをベースに、どのように日本の英語教育に対応すれば、効果のある学習法が適応出来るか、大手前大学、短大で講義をして、配布したアンケートを通して学生の反応、著者の意図を記述した実践報告である。

キーワード：意志の疎通を計る communicate effectively, 模索する figure out
プレゼンテーション presentation, 文法 grammar, 講義 lecture

初めに

今回の「英語動機学習法」は著者の9年間の大手前大学、短期大学の英語教授法の集大成である。この期間に模索してどのように講座を進めれば、英語力がのびるのか、効果のある教授法は何か、原点を探し求めた。その効果をまとめたのがこの論文である。

この論文は著者が今までに教えてきた各々の項目、それが学生にどのように映り、結果がどうだったのかを調べた。英語学習の目的は、英語という言葉をつかって、コミュニケーションを計ることである。それを計るには、文法、発音、発想法、プレゼンテーション能力、ヒアリング、ノンバーバル等、言語に関する全てを要求されるのでアンケートを学生に配布、それを集計、分析して議論する。

アンケートの配布¹

平成23年の春学期以降、短大1年生の基礎英語A、Bの2クラス学生数は31人、(前年の) Airlines Business Englishは15人、それに夏期講座にはEnglish Negotiationsで6

人の学生、全員で52人の学生がアンケートの対象となる。なお設問は26あったが、紙面制限のため、9の設問に絞った。

アンケートの内容

今学期もアンケートを継続しております。今後の英語の講義に参考します。すみませんが、下記の5つのレベルの中で最も適切と思う番号を選んで丸で囲んでください。

(1) この英語の講座を履修してから全体的に英語の履修に興味が湧いてきました。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0 2 19 8 2

Airlines Business

0 0 6 7 2

English Negotiations

0 0 1 1 4

Total :

0 2 (3.8%) 26 (50%) 16 (31%) 8 (15%)

(分析)

96パーセントの学生が英語の学習にある程度かそれ以上興味を湧いてきたと答えた。7年前論文を書き始めた時点では、英語という言葉を知りただけで「拒絶反応が頭に浮かび、英語のことは何も考えたくない」言った学生もいた。一体何が学生をしてそのような精神状態まで追いつめたのか。また、学生は中学、高校の時努力したと思う。しかし努力の見返りが殆どなかったと推測した。その結果、英語を投げ出したと判断する。英語の学習は他の教科と異なり、効果を出すには、ある特殊な学習方法で取り組まないと、効果が現れない。別の言葉で要約すれば、大半の学生は効果的な学習方法に気がついていないのでは…と著者は思う。それならば、学生が効果的に学べる教材を作れば良いと思った。教材も文法的に重点を置くのではなく、英語のプレゼンテーションの形で発表させて、話せる所までの勉強法まで高めなければならないと考えた。

また会話力を高めたい学生のためには教壇の前で英語で要約ができるような練習をさせて、実際にさせてみる。そしてまかりながらも、英語で要約が出来ることを自覚させるほど目的に合った学習法を施した。このように授業を通して身に付くような学習法で勉強すれば、授業の内容が分かってくるし、興味も湧いてくるし自信もつく。分かる

と勉強も面白くなり、成績もあがり、更に拍車がかかってくる。設問の解答が90パーセントという成果が表面化した。

(2) 授業中に先生が英語で話した時、理解しようとして耳を傾けました。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0 0 14 11 6

Airlines Business

0 0 4 7 4

English Negotiations

0 0 0 1 5

Total :

0 0 18 (35%) 19 (37%) 15 (29%)

(分析)

そう思う、本当にそう思うを合わせると、66パーセントになるが、最近の学生には、「聞く耳を持たない」学生もいる。それには2種類の学生がいる。1つは先生の講義には興味がない、英語の勉強はしたくない。2番目は講義の進め方、説明の仕方は余り信用していない。先生の教え方より、自分の仕方の方が効果的だからそれを続けた方がいい。この範疇の学生は問題が深刻化する。つまり、先生の説明より自分の学習法の方が優れていると思う訳だから、故意に先生の説明を表面上受け入れているように見えるが、そうではなく、自分なりに努力をしているわりには、上達が遅い。或いは分からない箇所はいくら説明しても（説明方法と内容を見逃しているから）分からないままで、そのままの状態で存在している。例えば、話す力を伸ばす時、前もって文章を書いて、それを繰り返して読んで1字1句暗記しないと、文節の要約が出来ないと決めつけて、取り組む学生はこの手順を踏んで、何回も練習しないと、要約が出来ない。そこで、著者は要約の手順を教える。(1)間違えた文章は、最初に直す。(2)文法的な間違い、語彙の間違い、意味上の間違い、それに発音のしにくい単語があれば、あらかじめ何度も練習して発音しやすくする。(3)また話す時、無理に口から強制的に出すのではなく、むしろ話しかけるように興味をもたせて自然に表現出来るような発音と姿勢で臨む。(4)全体の文章を読んで、内容を丸暗記するのではなく、内容の手順を理解すれば、もつれた糸をたぐるが如く、順序を追って話すと、話の筋が展開するので、脳からの信号が口につ

ながら単語が次から次へと発音され、文章となってくるようなプレゼンテーションを練習すればいいと言っても、それを履行しなくて、自己流に固持する学生もいた。そしてプレゼンテーションの途中で停滞して前に進むことができなくなる。内容が複雑で、話す時間が5分以上になって暗記力に頼ると、脳には限度があり、精神的に負担がかかり、最終的にはいらだってきて処理できなくなる。この時思ったことは、ただ丸のみして先生の言うことを聞くというより、理由をわきまえて、言うことを聞く素直な学生は語学力が伸びると思った。

(3) 講義を進める中で、英語で同じことを2回繰り返し、3度目に同じことを日本語で表現するやり方は、自分の英語の理解力を高めるのでいいと思います。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0	0	8	19	2
---	---	---	----	---

Airlines Business

0	0	7	5	3
---	---	---	---	---

English Negotiations

0	0	1	2	3
---	---	---	---	---

Total :

0	0	16 (32%)	26 (52%)	8 (16%)
---	---	----------	----------	---------

(分析)

「ある程度そう思う」はわずか32パーセントだが、残りの68パーセントの学生は著者が講義中英語で説明、話しかけることに関して、かなりいいコミュニケーションの計り方であると思っている。このことは、最初の授業で、最初の2回は英語で話すから、よく聞いて、何を話そうとしているのか、模索して、理解するように、それから、3回目は日本語で話すから、英語のヒアリングを高めるためにも耳を傾けるようにと説明した。後になって気が付いたが、これが功を奏していい結果として現われてきた。

(1) 授業中に英語で話すことは、学生も英語で質問する、或いは、電話で明日の授業には出席できない、少し遅れるなどの英語でコミュニケーションを計ろうとする動機付きの要因になった。(2) それは英語を学ぶ上で、リスニングの勉強にも繋がってくる。このようなメリットがあるのに、新聞には賛成しない意見が掲載されていた²。

北海道教育大学の宇田川 拓雄氏は (1) 世界の国々では、グローバル化を図り、英語

が国際共通語になっているために、将来日本でも英語教育を使える英語に変えていかなければならないという課題について、下記の理由で困難であると、日本経済新聞に記載している。³

(1)日本の大学では、英語で研究、講義をする人材がすくない。(2)大学生が就職すると、企業内で英語で業務を展開していくような人材育成は難しい。(3)海外で英語を駆使してコミュニケーションを計ろうとするためには、TOEFLで550点以上の得点が要求されて、それ以上の得点を持つ学生はわずか3パーセントにすぎない。(4)函館校の10年度の卒業生の就職を見ると、15パーセントが公務員と教員であった。「両職種とも平均的な語学力で十分である。」それに42パーセントが大企業、中小企業に就職したが、就職試験でレベルの高い語学力は要求されなかったので、必要性がない。(5)アメリカの大学でリサーチ、講座を持つには、TOEIC750点は必要であるし、大講堂で質疑応答をするには、「ビジネス業務が英語でこなせる900点は必要であろう。」と述べている。

大学での講座で英語を話す教員が少ないのは事実であるが、ではなぜ英語が話せる人材を養成しないのかということである。英語でコミュニケーションが計れるようなカリキュラムをつくっていけばできるようになる。これには、まず最初に英語の学習目的を設置しなければならない。つまり英語学習は入学試験に受かるためのものではなく、世界の人々と意志の疎通を計ることである。

先生の記事を読んでもみると、TOEFLで550点を取得した学生はわずか3パーセント、アメリカの大学で講義を受けるとができる学生のTOEICの得点は750点である。著者は何かこの2つの内1つをクリアすれば、講義の内容が理解出来て、質疑応答にも参加できるような印象を受けることができるように聞こえるが、現実はそんなに優しいものではない。著者はTOEFLで550点以上取得したけど、講義のノートが取れず、アメリカ人の学生のノートを借りて、毎日勉強していた日本人留学生をサンダバード校で何人も見てきた。⁴

国際化と英語教育を進めるためには、その対応策として幼年時代からのバイリンガル教育を勧めるのが得策である…と宇田川氏は述べている。著者はバイリンガル教育もさることながら、大学側としても今日から英語での講座を展開すべきだと思う。国際化と語学教育は諺の“Rome was not built in a day.”「ローマは一日にしてならず」の如く、長い歳月を要する。

英語学習は他の科目と異なり、1年位学習しても余り上達しない。羽藤氏は次のように述べている。「外国語を使う能力の伸びも直接的なものではなく、ところどころに進歩が足踏みする時期をはさみながら、全体としては、ゆるやかに伸びていく…⁵」と表現している。

そのために、学生本人が上達の度合いが計りにくいし、なかなか認識も出来ない。し

かし教えている著者には明確にわかる。また、英語がうまくなると、ある1つの個所、例えば文法事項、翻訳箇所がうまくなったというより、全体を通して上達さが現われてくる。例えば、最初に上達ぶりが分かるのは、教科書を読ませると(1)すらすら読めることである。それも強制して口から出すというより、自然に区切ったり、呼吸して声を出して読んでいる時、余り意識しなくても間を置いてすらすら読めるようになっている。また読む時の発音がなまりのある発音というより、ネーティヴにかなり近い発音で話している。(2)また、英語で会話を交える時も、何の躊躇もなく、言葉を駆使するレベルに到達しているし、使う単語が会話の内容に即して、比喩的に話せば、それは、日本の大工さんがのみを使って2つの木材に穴を掘ってつなぐ時、ピタット合って、何のギャップもないほど鮮やかなものになっていて、一貫性を帯びる境地に辿りついている。このような個所が適切な言葉となって、文章のあちこちで顔を覗かせる。そして冠詞の使い方からして表現されている英文からして明確である。著者はこれを見逃さない。これを聞いて、学生は大分うまくなったと認識する。その後に出るコメントは「大分うまくなったね」である。これを聞いた学生は手答えを感じる。そこに見るのは、微笑みと満足感だ。

(4) 先生が講義内容、文法、それに関連事項を英語で説明すると、最初は何を言っているのかさっぱりわからなかったけど、状況判断、説明箇所との関連性を考慮、模索しながら努力したけっか、ほやけているけど、内容が少しずつ分かってきました。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0	0	18	7	6
---------	---------	----------	---------	---

Airlines Business

0	0	8	4	3
---------	---------	---------	---------	---

English Negotiations

0	0	0	3	3
---------	---------	---------	---------	---

Total :

0	0	26 (50%)	14 (27%)	12 (23%)
---------	---------	----------------	----------------	----------

(分析)

英語を聞いて、そのまま英語で理解するという方法はかなり困難をきたす。この方法は時間とかなりの努力を必要とする。しかし、長い目で見れば、正解である。また、英

語を日本語に頭の中で訳して、理解しようとすれば、様々な弊害が生じる。例えば、学生が使われている単語の意味が日本語で全て理解されていても、全体の文章がうまく訳せないこと、最終的には、おかしい日本語になってしまう。He sent for me. (彼は私にここに来るようにお願いした。) Wish me luck. (試験を受ける時などに、私に幸運が巡るように祈ってくれ。) You made my day. (今日一日色々なことをしたけど、貴方と話したり、やったことが一番楽しかった。) 等の文章は訳しにくい。また、英文で2つのよく似ているような文章を見るとネーティヴスピーカーには明確でも日本語では、全く意味の異なる場合がある。(1)The lawyer went to jail. (2)The lawyer went to the jail. がその例である。最初の to jail の場合はある名詞が無冠詞と伴に使われているから「使われている名詞本来の意味をあらわす。」つまりjailは拘置所、監獄を意味する。それ故に「その弁護士は拘置所に行った(服役した)」という意味だ。2番目の文は「その弁護士は拘置所に行った。」という意味だが、これは仕事の関係上拘置所の建物に囚人に会いに行ったとも解釈される。英語の場合、冠詞の a, an, the があるかないかで、こんなに意味が変わってくるのを教えるのもおもしろい。またこのように無冠詞の例を文章として比較すると、学生にはわかりやすい。(1)My parents go to church on Sunday. (2)My parents will go to the church on Wednesday for a meeting. もそのいい例である。「無冠詞+名詞」は前の例と同様、使われている名詞その物を表現するから、(1)の文章、両親は日曜日に教会へ行くは、(教会の本来の主旨はお祈りをする所だから)両親は日曜日に祈りをするために教会へ行く。(2)はお祈りのためではなく、会合のために教会にいくのである。最初に記述した He sent for me. The lawyer went to jail. My parents go to church on Sunday. などの文章を聞いても、冠詞が使われているか、いないなど聞き取ることは余程耳が訓練されていないと、聞き取りにくいので、このような時はプリントに比較分と説明が必要になる。

(4)の設問では、50パーセント以上の学生が先生の講義内容を模索しながら聴いていると答えた。最初は分からなくてもいい。少しずつ耳をならして、一字一句を念入りに聴くより、全体を通して、何について話しているのかを理解する、つまり全体の像或いは、絵を頭に描くことが必要だ。言語、語彙は非常に抽象的なものであるから、ある言葉を聞いても残りにくい。最悪の場合、言葉を右の耳から聞いても次の刹那な時間に左耳から出て行ってしまい、頭の中で即座に消えてしまうことが往々にしてある。単純な意味を持つ言葉は聞いて、理解できるが、抽象的な意味を持つ言葉は把握しにくいし、覚えにくい。deskとかchairは比較的理解しやすいし、覚えやすいし、頭にも残り易い。でもcategory(範疇)、synergy(折衷案)などの言葉は抽象的な色彩が濃厚で、理解しにくいし、覚えにくい。この理解度を補うのに役立つのが頭の中に描く絵である。相手が話している時に、注目しながら聴くと同時に頭の中で絵を描いて、理解すれば、ある

程度時間がかかっても残像として残る。category の絵は2、3のグループを描き、synergy はアメリカ人と日本人の2チームが考案した2つの案を取り入れて、最終的には1つの案にまとめるような折衷案を描くのである。まとまった絵は一時的に頭に残る。ある程度の時間は残像が保存されるし、場合によっては、数日後残像を蘇らせることもできる。

(5) 文法のプリントの説明は簡単明瞭で、的を得ていて分かり易いです。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0	0	18	9	4
---------	---------	----------	---------	---------

Airlines Business

0	0	6	6	3
---------	---------	---------	---------	---------

English Negotiations

0	0	2	2	2
---------	---------	---------	---------	---------

Total :

0	0	26 (50%)	17 (33%)	9 (17%)
---------	---------	----------------	----------------	---------------

(分析)

50パーセントの学生がある程度そう思う、残りの50パーセントの学生がそう思う、本当にそう思うと記入した。プリントは教える英語の教科で大切なものだ。プリントには凡そ英語を勉強する上で全ての項目が挙げられている。つまり、これを勉強すれば、英語がわかる。上達する。話せるようになるという虎の巻だ。文法の説明箇所は出来るだけ簡単にして、ルールも分かり易くした。説明が終わると、即座に練習問題に取り掛かるようにした。これは、いくら説明が理解されても、必ずしも構文を使って英語の文章が出来るとは限らないからだ。学生の文章を見ても、出来ていない、或いは間違いのある文章が多い。また、英語の単語でも句だけを勉強するのではなく、必ず文章を作成させる。例えば、仮定法過去の構文を使って勉強するとしよう。

仮定法で学生が混乱して、使いこなせない理由の1つは、仮定法過去、現在、未来の内、どの構文を使っているのかわからなくて、迷うからである。仮定法過去を使う時は、過去の時制となるような含み、それに言葉、例えば「あの時、当時、あの頃」等の過去の事柄に関する言葉があれば、仮定法過去を使い、「今、今日、現在の事柄に」に関する状況であれば、仮定法現在を使い、「明日、来週、来年」等将来のことがらには、仮定

法未来系を使えばいい。

(6) プリントには、文法事項の説明の後に関連事項の練習問題が掲載されているので、自分が理解できた箇所の理解力を適応して、今度は練習問題をすることによって試すことができるので有益です。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0 0 8 21 2

Airlines Business

0 0 9 3 2

English Negotiations

0 0 1 2 3

Total :

0 0 18 (35%) 26 (51%) 7 (14%)

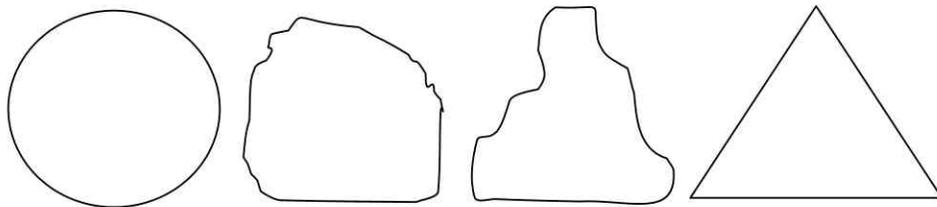
(分析)

文法の説明が終わると、その構文を使うために、日本語で文章を書き、それを英語で訳させる方法がある。これは学生にとってはかなり難しい。最初に直面する問題は、日本語を英語では表現方法が異なるから、どのような事柄に注目しなければならないか分からない。学生にとっては、主語、動詞、目的語といったふうに英語の言葉を置き換えれば英文になるというような考えが浮かんでくる。そのために、文法的な間違いだけでなく、表現方法にもてまどう。

日本語

英語

1 2 3 4 5



図の説明⁶

この図を比喩的に述べると、日本語の全体像を円形で、英語は三角形であるとしよう。円形を英語の三角形に変形させてみよう。丸い形を三角形の中に取りめようとしてもうまくおさまらない。そのために、日本語の円形を少しずつ三角形におさめるように変形する調整が必要になってくる。そのステップを踏んだのが上の図である。丸い形の日本語はステップ1から2、3、4、5へと英語の三角形に変形していく。この変形行程が調整である。手数をかけて調整をすればするほど、英語に近くなる。この調整は更にもう1つの利点がある。それは、学生が作成した英文に直しても、それで満足せず、さらに調整を求め続けて、模索する余地があると考える学生は今後とも伸びる。その反面、そのようなことを考えないで、作った文章で満足する学生は余り伸びない。

(7) プリントには dictation の個所が用意してあります。今まで勉強した箇所を英語で書くことですが、綴りを練習すること、先生（あるいは）学生が口頭で読んでいるスピードに出来るだけ合わせていますが、この練習いいと思います。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う

基礎英語 A, B

0 0 12 14 6

Airlines Business

0 0 8 4 3

English Negotiations

0 0 1 4 1

Total :

0 0 21 (40%) 22 (42%) 10 (19%)

(分析)

dictation は非常に大切な学習である。英語の単語は日本語やスペイン語と異なり、a というアルファベットを例にとっても、様々な発音がある。apple, eat, lake, talk などがその例である。そのために学生にとっては綴りにくい単語もある。著者はアメリカに在住中興味深いことを目撃した。

スペルも練習しないと書けない⁷

著者はある日住んでいる近くの洗濯屋さんに入っていくと、黒人の先客がいた。年齢は35歳くらいに見えた。その男性はお金を払おうとして、ポケットから小切手を出すと、

思わず小切手を洗濯屋さんの前を出して、サインを署名する所にXのマークをペンで書いた。著者は不思議に思って、どうして名前をサインする所にXを書いたのかと思った。すると、洗濯屋さんは、英語で twelve and 57/no と書いてサイン欄に黒人の名前を書いた。それを見るなり、この人は文盲なのだ気が付いた。話している言葉は普通のアメリカ人と変わらない。会話は生まれた時から、聞いたり、話したりしているから、使える。しかし書くことは別問題だ。いくら話せても、聞けても書くことは、勉強しなければならない。字が読めないということはどういうことなのか、前にこのような話を聞いたことがある。

アメリカで運転免許証を取得するとき、試験を受けるが、最近では、筆記試験もある程度機械化がすすんでいるので、コンピュータをつかって、文字ではなく、写真を見せて、解答を選ばせる方法もある。ある日、文盲のアメリカ人が試験を受けて合格して、免許証をもらった。それから間もなくして、one way と書いてある標識の道路を反対側から車を運転して、入って行き、大きな事故を起こした。

dictation は様々な効果をあげるのにすばらしい機会だと思う。(1)まず最初に学生が文章を読むとき、白板に聞いた文章を書くが、単語が分からないと書けないし、スピードが伴わない。また、読んでいる学生の声が小さいと支障をきたすので注意する。(2) dictation の大きな長所はこの練習が要約の前の段階で行われることも考慮して、綴っている語彙、意味、構文、文章全てが今まで学習してきたことを包括しているのだから、英語を耳で聞いて、頭で理解して、それが指に伝わり、文字の形で表現する。書いている指が脳と直結して、全てが一体化されて、機能を発揮しているのである。また間違いがあればそれを指摘して、正しい綴りで書かせ最後に学生一人一人に読ませる。

(8) プリントの最後には「要約」があります。これは習った箇所をまとめて、一回目は自分が書いた英文を習った単語、文法事項、発音も交えて口頭で言いプレゼンテーションの形で教壇の前にきてさせます。それから2度目は原稿を見ないでもう一度やります。このようなやり方は習った英語を皆の前で発表することになるので、自信がついて効果があると思います。

1	2	3	4	5
全然そう	そう	ある程度	そう	本当に
思わない	思わない	そう思う	思う	そう思う

基礎英語 A, B

0	2	18	10	2
---------	---------	----------	----------	---

Airlines Business

0	0	6	7	2
---------	---------	---------	---------	---

English Negotiations

0 0 0 2 4

Total :

0 2 (4%) 23 (44%) 19 (37%) 8 (5%)

(分析)

ある章が終わると、この要約が一番最後になるが、要約が口頭で出来るようになれば、学生としても「誇りに思いなさい」といって励ます。今までに学習してきた語彙、構文などを出来るだけ使って、要約に臨みなさいと言って励ます。またこのアクティビティは今まで学習してきたことで一番大切なことだから、全精神をかたむけてチャレンジするようにとお願いする。要約の出来ない学生は教科書の英文を丸映しして、そのまま丸暗記に頼っていたがうまくさばけなくなった。これでは、創造力が発揮されていないので、出来るだけ自分の言葉で文章を作り、プレゼンテーションに臨むように励ます。また文章が自然にすらすら出てくると、今度は、必要な個所があれば、非言語的な表現も出すようにと励ました。ある本には、内容が言語によって聞き手に伝わる部分は僅か35パーセントで、残りの65パーセントは手、足、身振り、しぐさなどの非言語的表現によってなされるというノンバーバル（非言語的表現）の重要さがある⁸。

やがて3分程度のプレゼンテーションをどうにか終えた学生には拍手を送り、よくできたと言って褒めてやる。学生の顔には、自分でもよくやったという満足感があらわれているのを著者はみのがさない。このように教壇の前で英語で話すなどの経験したことがない学生が大半なので、いい経験になる。

(9) 各課の終りの要約は以前の授業では余り強調しなかったもので、まとめると言ってもどのようにすればいいのかわかりませんでした。説明を聞いたり、サンプルを見て、実際にやってみると、ある程度英語の要約ができて、自信が持てるようになりました。

1 2 3 4 5

全然そう 思わない	そう 思わない	ある程度 そう思う	そう 思う	本当に そう思う
--------------	------------	--------------	----------	-------------

基礎英語 A, B

0 6 17 6 2

Airlines Business

0 0 5 7 3

English Negotiations

0 1 1 3 1

Total :

0 7 (13%) 23 (44%) 16 (31%) 6 (11%)

(分析)

ある程度そう思う、そう思う、本当にそう思うの学生を全部合わせると、86パーセントというかなり多くの学生がこのアクティビティーに関して満足している。それに、著者が最初から英語学習の目的としていた自分の文章に創造性を持たせて使える英語、自分の意見を他の人の前で述べる英語、英語学習の目的は文法を勉強するのではなく、コミュニケーションの道具として、意志の疎通を計ることであるという目的に向かって学習に励んだ学生を誇りに思う。(9)番の設問では86パーセントというかなり高い数値が出たけど、学生は、はたして真剣に取り組んでくれたのであろうかという疑問が著者の脳裏に浮かんだ。そしてその信憑性を見るために、(8)番と(9)番の設問を比較することにした。

(8)番と(9)番の設問の比較

(8)番と(9)番の設問は基本的に同じような設問である。アンケートを記入してくれた学生が真剣に取り組んで、答えてくれたかを調べるにはいい機会だと思ったので比較することにした。

1	2	3	4	5
全然そう 思わない		そう 思わない		ある程度 そう思う		そう 思う		本当に そう思う

(8)の設問の結果

0 1 (2%) 23 (44%) 19 (37%) 8 (15%)

(9)の設問の結果

0 7 (13%) 23 (44%) 16 (31%) 6 (11%)

となっている。2番目の「そう思わない」の個所は配分が1パーセントと7パーセントでかなり異なるが、残りの部分の配分は近似値である。これを別の言葉で表現すれば、学生の設問に答える姿勢には信憑性が窺われる。

結 論

大手前大学、短期大学で教鞭をとってから9年半過ぎた。この間著者は日夜、学生はどうして英語が分からないのか、なぜ出来ないのかと模索しながら今日という日を迎え

た。学生の動機もさることながら、教える方にも最良の条件で教えてやらなければならない。いい教授法がないかと探した。そして気がついた。それはいい教材を作ることだと思った。

各章では、使われる英語の語彙、構文を使って文章を創造させる。文法の説明を理解して、例文の構文を参考にして、日本語を英文に変える。教科書の英文の質問に英語で答える、リスニング、dictation、それに summary のサンプルを参考にして、要約を作成してプレゼンテーションの形で発表させる。また、講義中は絶えず英語を話して、学生に注目させる教え方はかなり効果があることに気がついた。

FOOTNOTES

1. アンケートは平成23年度春学期と夏学期に大手前大学、短期大学の教科、2つの基礎英語、前年のAirlines Business English, それに夏期講座のEnglish Negotiations 全部で4教科を対象にして行われた
2. 日本経済新聞、2011年10月24日、朝刊、p. 23 「英語で授業」拡大難しく教員、学生 国際化の条件満たさず、宇田川拓雄
3. Ibid., 宇田川拓雄
4. 著者は1973年9月から2001年5月までアメリカ国際経営大学院、通称サンダバードMBA ビジネススクールで28年間教鞭を取り、日本人留学生の学生生活を見た。
5. 英語を学ぶ人、教える人のために「話せる」のメカニズム、羽藤由美、p. 20
6. 英語に興味を持たせる教え方、熊山晶久、大手前大学、短期大学紀要
7. 1995年10月に著者はこの光景を自宅の近くの洗濯屋さんでこれを目撃した。
8. 非言語コミュニケーション、ジョリー F. ヴァーガス著、石丸正訳、p. 15

参考文献

- 宇田川拓雄 (2011) 「英語で授業」拡大難しく教員、学生国際化の条件満たさず 日本経済新聞
- 熊山 晶久 (2004) 英語に興味を持たせる教え方、大手前大学、短期大学紀要
- 羽藤 由美 (2006) [英語を学ぶ人、教える人のために「話せる」のメカニズム] 世界思想社
- ジョリー F. ヴァーガス (1987) 石丸正訳、非言語コミュニケーション新潮社